

太宰府の文化財

榎社の発掘調査

191

朱雀六丁目所在

延喜元年（901）大宰府に左遷された菅原道真は官舎として大宰府政庁の南に建てていた館を与えられます。館といっても茅葺きでしばらく空き家だったため修理が必要



▲社殿下の建物跡



▲わだちの痕跡

れ、それが今の榎社であるという話が、太宰府天満宮の成り立ちを伝える文書に書かれています。

また鎌倉時代の半ばに成立した『古今著聞集』という説話集にも、天神が住んだ所で、惟憲がその跡を偲んで一寺を建て、それが浄妙寺であるという話が載っています。

このような言い伝えがある榎寺（明治の神仏分離以後、

榎社に名称変更）の地を昨秋調査しました。社殿の建て替えと参道の石畳の張り替え工事に伴う発掘調査なので、境内全域に及ぶものではありませんでしたが、いくつかの興味深い発見がありました。

まず社殿の場所では今まで

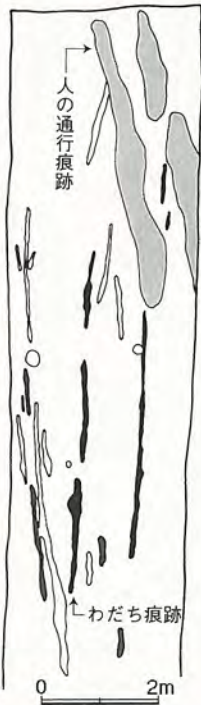
建っていた建物とほぼ同じ大きさの建物跡が見つかりました。建てられた時代は平安時代の後半から明治時代までという大変長い期間のいつかというところで、これ以上詳しい年代は残念ながら今回の調査では分かりませんでした。今の社殿は前代の規模を踏襲していたことが分かりました。

参道も石畳の下はやはり道路で、3時期にわたる道路の跡が出土しました。その中で特に平安時代後半の層と江戸

時代の層にはさまれた層から見つかった道路では車の轍と人間が歩いた痕跡が残っていました。轍からは車輪の幅が約110cmの車が復元されます。現在も続いている神幸式などの牛車の轍かもしれませぬ。少し狭いですが。

もう一つ興味深いのは、クスの移植のために境内の入口近くを掘ったところ、多数の平安時代前半に作られた土師器の皿が出てきたことです。これらの皿には灯明を燃やした芯の痕が残っていて、たくさんさんの灯明があげられたことがあったことを想像させました。

ここが平安時代のある程度早い時期から灯明をあげる所であったことが分かり、浄妙寺の伝承とどうつながるか、今後の調査研究が楽しみです。



太宰府の文化財

192

絵馬「吉備大臣図」一面

縦86・6cm 横96・9cm 枠幅10・6cm
板地著色 明治23年か 坂本八幡宮(坂本区)所在



画面の右上に「吉備大臣、野馬台之文を讀図」と書かれています。これは吉備大臣つまり吉備真備が遣唐使として中国へ渡り、いろいろ不思議なことに遭うというお話に題材を採ったものです。

平安時代の終わりに成り立たと考えられる大江匡房の談話を筆録した説話集『江談抄』にもこの話が載っています。話のあらすじは、吉備真備が唐土に着くなり高い楼の上に閉じ込められて殺されそうになりますが、鬼と化した阿倍仲麻呂の霊が現れ、真備の威に服して助力を約束します。楼に閉じ込めても死ななかつたため、唐人は真備の才知を試すため難読で有名な『文選』の解説、次に囲碁の勝負など難題を与えますが、真備は仲麻呂の霊に助けられて難局を切り抜けていきます。

物を運んだため、数カ月経っても真備は死にませんでした。そこで唐人たちは今度こそと、密法を行う高名な宝志という僧に難解なパズルのような詩を作らせ、皇帝の前で真備に読ませることにします。

今度ばかりは鬼も手を出せぬ状態だったので、真備は日本の住吉大明神と長谷観音に祈ると、一匹の蜘蛛が降りてきて文の上をはい回るのでした。蜘蛛に導かれて文字をたどっていくと、さしもの難解な詩も読破することが出来たというお話です。その詩が野馬台の詩です。

閉しますが、真備は唐土の日月を封ずる呪術によって、皇帝を降参させ、無事、日本に帰国することを許されたというところで終わっています。

以上が『江談抄』や『吉備大臣物語』『吉備大臣入唐絵巻』に載るお話です。

前述したように野馬台の詩の話は江戸時代には庶民に良く知られており、また、明治の初め、新歌舞伎18番の「吉備大臣支那譚」として初演されるなど、人々に身近なお話だったのではないのでしょうか。それは絵馬の題材としてはうってつけのものでした。

この絵馬には、中央に野馬台の詩を読む真備、その周りにそれを見つめる皇帝、宝志、女官、官人たちが描かれています。蜘蛛も描かれていたのですが、色がかなり落ちていたので、分かりません。

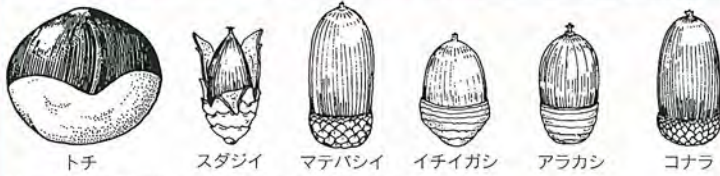
この絵馬が描かれたと思われる明治23年(1890)は日清戦争が起こる4年前に当たります。

太宰府の文化財

193

貯蔵穴

大きさ 径1・3〜1・6m 深さ0・3m
弥生時代 雑川遺跡（大佐野区）出土



トングリの種類

〔日本の野性植物 木本〕・〔園芸植物大事典〕から

現代の私たちはどんな季節でも食料に困るといふことはありません。お店に行けば世界中からの食べ物が入り、家でも冷凍庫や冷蔵庫を利用すればかなり長い間、食料を保存することが出来ます。でもそんな技術や道具がなかった時代、人々はどうやって食料を確保し、厳しい季節に備えたのでしょうか。

その一つの方法を示すものが大佐野の区画整理地区の発掘調査によって見つかりました。それは穴の中に埋められた、たくさんのトングリでした。この遺跡は弥生時代の遺跡でしたので、穴も弥生時代に使われていたのでしょうか、このようなトングリの貯蔵穴は弥生時代の前の縄文時代から盛んに作られていました。

貯蔵穴は日本の各地で見つかり、形は直径が1m前後、深さ1〜1・5mくらいの袋状か、口より底の方がやや広いフラスコ状をした竪穴です。その中に東北日本ではトチ、

クルミ、コナラ・ミズナラなどいわれるナラ類のトングリを、西南日本ではシラカシ・アラカシ・イチイガシなどのカシ類のトングリ、シイ、マテバシイなどを貯蔵しました。大佐野で見つかったトングリはほとんどがイチイガシです。

イチイガシやシイ、マテバシイなどはそのままでも食べられますが、カシやナラのトングリやトチはアク抜きが必須です。アク抜きは粒のままあるいは粉にして水に晒したり、煮出してアク抜きをする方法、木炭汁つまりアルカリで中和してアクを取り除く方法などがあります。

木炭で中和する方法が一番難しく、トチの実はこの方法でなければ食用にすることが出来ませんでした。実が大きいのと、不作がほとんどなことも、乾燥させれば何十年でも保存がきくので、縄文時代から近年まで貯蔵食として最も重要でした。

トチの実は大東北日本が中心

でしたが、この辺りで主に食べられていたカシ類は水晒しや煮出ししたり、比較的簡単なアク抜き方法で食べることが出来ました。イチイガシやマテバシイもアク抜きをしなくても食べられますが、スタジイの5〜10倍のタンニンを含むので水に晒した方が味が良くなるそうです。大佐野で見つかったイチイガシは水に浸かった状態だったので、一つは虫食いを防ぐためかとも考えられますが、アク抜きとも関係があるのかもしれない。

ブナやナラ、カシなどのトングリ、シイ、クリなど澱粉がたっぷりつまった実をつける温帯の森が広がると、人々はこれら木の実を貯蔵食料にして少しずつ定住生活に移っていきます。これらのアク抜きのためや加熱調理のために世界的に見ても最も早い土器の一つ縄文土器は生まれたと考えられています。

貯蔵穴を通していろんなことが見えてきます。

太宰府の文化財

194

関屋の道しるべ

江戸時代 坂本一丁目所在



水城小学校のそばの関屋の
交差点に鳥居が立っています。
この鳥居は太宰府天満宮の一

の鳥居といわれ、天満宮参詣
のさいふまいりの道に立つ鳥
居です。(平成11年11月1日

- ▲左から
①鳥居
②関屋橋の標柱
③宝暦の道しるべ
④元禄の道しるべ
⑤潮斎台
⑥常夜燈



▲宝暦の道しるべ

次が宝暦2年(1752)に建てられた道しるべです。「天満宮従是二十五丁」



▲元禄の道しるべ

写真でいくと、鳥居に近い方から、まずは四角の標柱。これは明治7年架、明治20年再架の関屋橋の標柱。

も前の元禄4年(1691)のことです。福岡呉服町の帯屋宇兵衛が寄進しています。

次回は潮斎台のことをお話ししましょう。

号参照)
現在は道路が拡張され、片側車線にだけ立つ形になっていますが、昔は博多往還(日田街道)からここで道が岐れ、鳥居をくぐって天満宮へと通じていました。そんな道の分岐点でもありませんので鳥居の側に道しるべと潮斎台、常夜燈も立っていたのですが、これも道路拡張で、上り車線を隔てた場所に移されています。さいふまいりの道を照らした常夜燈のことも平成11年12月1日号で書きましたので今回はその横に並んでいる道しるべについてです。

と彫られ、「八百五十年祭」という文字も読めます。宝暦2年は菅公が亡くなって850年の御神忌八百五十年祭の年です。その記念の時に寄進されたものでしょう。
この碑のことは享和2年(1802)5月に太宰府天満宮に参詣した尾張の豪商菱屋平七が書き残した「筑紫紀行」にも載っています。それによると、この碑には近国への道のり「小倉へ二十里 日田へ十二里 久留米へ七里 長崎へ四十里 柳川へ十三里 島原へ四二里 佐賀へ十三里 唐津へ十六里」も記されていたようですが、残念ながら現在では風化して読み取ることはできません。

ところで江戸時代は社会が平安になったこと、街道や船路の整備など交通事情が良くなったこと、民衆に時間と経済的な余裕が出来て来たことなどで旅行が盛んになった時代でもありません。
中でも社寺においては御礼などを配って各地を廻りながら信者獲得を積極的に行い、参詣者の宿泊施設を整えたり、奉納の取り次ぎをしたり、というように参詣の便を計って人々を集める努力をしたため、社寺参詣の旅がブームになりました。お伊勢参りなど特に有名ですが、太宰府天満宮へ詣るさいふまいりも前述の例のように全国各地からの人々で賑わいました。
今では車で素通りしてほとんど足を留める人もいなくなりましたが、その昔はさいふまいりの道しるべ、旅の道しるべとして、多くの人々が頼りにした石碑でした。

太宰府の文化財

195

関屋の潮齋台

江戸時代 坂本一丁目所在

前回に引き続いて関屋の石造物についてです。

元禄4年の道しるべと常夜燈の間にあるのが潮齋台です。



- ▲左から
①関屋橋の標柱
②宝暦の道しるべ
③元禄の道しるべ
④潮齋台
⑤常夜燈



▲関屋の潮齋台

付近では春秋の社日（彼岸に最近）

ちなみにこの天満宮の衆徒華台坊を取り次ぎに福岡や博多の商人や鍛冶屋、大工など十数人の人々が潮井を奉納したと思われる、名が刻まれています。碑の裏面には宰府の大庄屋近藤良七、三浦次市の名も見えます。

三浦之碑はもう1カ所立っていたと言われ、それは三条の三浦橋のほりです。粕屋・宇美方面から参詣に来る人たちが身を潔める場所だったのでしよう。しかし現在は洪水で流されたのか残念ながら見当たりません。ただ、五条橋の三浦之碑もいつしか天満宮の西門の所に置かれていたのを近年現在の場所に移したそう、この碑が本場に五条橋のものだったのかはつきりしません。あるいは三条橋のほりに立っていた石碑の可能性も考えられます。

りの村々の大庄屋たち口人の名が刻まれています。潮齋台というのは、身を潔めるための砂を置いていた台です。

も近い戊の日に箱崎浜へ砂潮井を取りに行き、竹で編んだ「お潮井てぼ」に入れ、戸口につるして、外出の際に一つまみ体に振ってお祓いをする習慣があります。

北部九州から瀬戸内海沿岸の広い地域で、神社や齋場、家や身体を潔めるために海水を汲んで、その潮水をまくという風習があります。その海水のことを潮井（潮齋）と呼びますが、場所によっては海水に限らず、海の砂であったり、川砂、湧水、川水、海藻

さて、さいふまいりの道にはもう一つ潮齋に関する石碑があります。県道に架かる五条橋のたもとに立つ、俗に三浦之碑と呼ばれる石碑です。

▶奉納三所塩食碑（三浦之碑）



銘文によると文久2年（1862）に奉獻されたもので石工は廣田文右衛門、そして高原や大賀という当時のこの辺

だつたりします。ここでも砂が潮井として使われました。つまり太宰府天満宮参詣に当たって、潮齋台の潮井（砂）で身を潔め、汚れない身体になつて一の鳥居をくぐり、天満宮に向かったのです。

江戸時代 五条一丁目所在 碑文によるとこれは文政13年（天保元年・1830）に立てられたもので、文字は聖福寺の仙屋和尚の筆です。古くから齋戒の靈地であった伊勢の二見浦、和歌山の和歌浦そして筑前の箱崎浦の潮井を持つて来て御笠川の水を潔めたのではないかと思われ、その記念にこれを立てたのではないでしようか。禊の場として御笠川を使ったのでしよう。

天満宮の衆徒華台坊を取り次ぎに福岡や博多の商人や鍛冶屋、大工など十数人の人々が潮井を奉納したと思われる、名が刻まれています。碑の裏面には宰府の大庄屋近藤良七、三浦次市の名も見えます。

奉納三所塩食碑

三浦之碑はもう1カ所立っていたと言われ、それは三条の三浦橋のほりです。粕屋・宇美方面から参詣に来る人たちが身を潔める場所だったのでしよう。しかし現在は洪水で流されたのか残念ながら見当たりません。ただ、五条橋の三浦之碑もいつしか天満宮の西門の所に置かれていたのを近年現在の場所に移したそう、この碑が本場に五条橋のものだったのかはつきりしません。あるいは三条橋のほりに立っていた石碑の可能性も考えられます。

太宰府の文化財

196

太宰府天満宮絵馬堂の絵馬

太宰府天満宮所蔵



▲「仰高」の書 ※絵馬の手前に金網がかけられています。

太宰府天満宮の絵馬堂に掲げられている絵馬を取り上げます。

「仰高」の書 1面

縦174cm 横270cm

杉材 江戸時代

野村玄敬筆

この絵馬は江戸時代の宝暦14年(1764)に肥前国長崎の人たちが寄進したものです。

「仰高」の字も長崎の野村玄敬という人が書いています。野村玄敬がどういふ人だったかはつきりしたことは残念ながら分かりません。ただ、江戸時代の人で、野村雲洞という長崎の書家がいるということが、弘化



▲絵馬堂

5年(1848)あるいは嘉永7年(1854)に出版された『古今墨蹟鑒定便覧』に載っています。雲洞は名を思敬といい、醉墨と号したとあります。江戸時代のいつごろの人かは書かれていませんが、「鑒定便覧」が編集されたころかそれ以前の人ということになります。

長崎の人で、名に使った「敬」の字が共通すること、天満宮の絵馬が宝暦14年で、「鑒定便覧」が編集されるより前のものだから、時間の矛盾は生じないことから、もしかしたら、野村玄敬と雲洞(思敬)は同一人物か縁のある人と考えられないこともないような気がします。ただこれ以上のことは現段階では分かりませんので、玄敬なり雲洞の新しい資料が見つかるのを期待したいと思います。

「仰高」の意味は読んだとおりで、「高きを仰ぐ。高德あるものを仰慕する」という意です。ここでは、文道の神天神様の高德を仰ぐということで、この字を選んだのではないのでしょうか。

この絵馬は朱の文字が大変印象的です。でも良く見ると文字と枠の縁部分には金箔がかすかに残っています。奉納された時は金箔が貼られていたのでしょうか。絵馬の背面の記述にも金箔を寄進したとして3人の人の名が残されています。往時の光輝く華やかさは失せていますが、それでも文字だけ別の材で作って貼ったか、漆を積み重ねてその厚みを出したかという、この絵馬は人目を引くに充分です。

最後に絵馬の裏に朱漆書で残された文字を記しておきます。
「宝暦十四甲申歳六月吉祥日」
「肥前国長崎／井手長雲／同茂平次／同 要右衛門／同 茂七郎／同 太十郎／松尾勘十郎／井手茂三郎／朱寄進／角谷豊次郎／箔寄進／泉木武兵衛／野村又兵衛／同 助五郎／布寄進／渡来源次郎／番匠／宮城吉郎太／塗師／野尻新兵衛」が、「宿坊／検校坊」を取り次ぎにこの絵馬を「奉獻」しました。なお、番匠というのは大工のことで、塗師は漆塗りの職人のことです。

太宰府の文化財

197

太宰府天満宮絵馬堂の絵馬

「感通」の書

1面

江戸時代 横田義民筆 太宰府天満宮所蔵



▲「感通」の書 板地 縦184cm 横294cm

太宰府天満宮の絵馬堂に掲げられている絵馬を取り上げます。丸みのある字で感通と書かれたこの大きな絵馬は、江戸時代の寛政6年（1794）に奉納されたものです。感通とは「思いや精気などが他へ通じること」という意味で、儒教の基本的文献の一つである「易経」や「後漢書」などに出ている言葉です。

これを書いたのは「筑前書官横田義民」です。義民のことははっきりしませんので横田姓の書家を拾ってみます。

まず、「筑前名家人物志」の書家の部に、享保中（1716～1735）の人ということで「横田士義、号鳳鳴」の名があります。彼は各書体に妙手で、特に大文字、中でも隸書が上手であるとも記されています。士義は享保に活躍した人ということでしょうから、この絵馬が奉納された寛政年より60年も前のことで、横田義民が士義というのは難しいでしょう。

次に宝暦13年（1763）末に来日した朝鮮通信使が日本人

と詩の唱和や学術の問答をした記録のなかに、福岡藩関係者として「筑州写字官横田義民」の名が見えます。絵馬に書かれた書家の名と同じです。職業も写字官ですから字を写す、字を書くのを仕事としていたということとで書家はピッタリ。また絵馬の年号より30年くらい前の話ですから、同一人物だと考えても無理はないと思います。

もう一つ絵馬の書家として可能性がある人に「横田久平」がいます。横田久平は「黒田藩新続家譜」巻之四十四によると、享和2年（1801）、播磨に黒田孝高（如水）の祖父である重隆と、その子職隆（つまり孝高の父）の夫人の墓を作り直した時に、墓の墓誌の文字を書いた者として「大文字役横田久平書」とあります。他に文化14年（1817）の福岡藩の分限帳「書家 拾三石三人扶持、城代組横田久平」と記されています。分限帳とは江戸時代、大名の家臣の名前・祿高・地位・役職などを記した帳面のことです。

以上のように寛政6年の絵馬の書家として可能性がありそうな人を探してみましたが、次に宝暦13年（1763）で出てくる横田義民と文化14年の横田久平が同一人物かどうかということですが、

これはあくまで推定ですが、朝鮮通信使と交流するには、余り若い年齢では無理だろうから、おおよそ30歳くらいとすると、分限帳の時は84歳になりますので、生きていても次の代に家督は譲っているのではないかと、そう考えると義民と久平は別人、しかし親子と考えられないことではない、分限帳にも家業が書家となつているから、久平の代で急になつたとも思えないなど考えまして、次のように想像してみました。

この絵馬は署名からすなおに朝鮮通信使と関わった横田義民が書いたものとし、享保年中の横田士義、享和や文化年に出てくる横田久平はその祖父なり子、あるいは一族、ゆかりの者ではないかということですが、あくまでも推定ですが。

太宰府の文化財

「戒壇院」額

(198)

縦73・5 cm 横156 cm

江戸時代 戒壇院蔵



戒壇院の本堂に掲げられている木の額です。「戒壇院」と雄渾な筆致で書かれ、「黄檗木庵書」と署名があります。額の裏面には「延宝三甲寅孟冬日 願主 加藤弥左衛門 鎌田八兵衛敬白」などの文字も刻まれています。

これにより、この額の字は黄檗僧木庵禅師が書いたもので、延宝2年(1674)10月(陰暦)二人の願主によって戒壇院に寄付されたことが分かります。

ところで木庵禅師は木庵性瑫といひ中国の人で、福建省の黄檗山万福寺の隠元隆琦の弟子です。江戸時代初期の承応3年(1654)に招かれて来日した隠元の招きで翌年、長崎に渡来、寛文元年(1661)、隠元に従って京都宇治の黄檗山万福寺に移りました。寛文4年(1664)隠元のあとを受けて万福寺の第2代住持になり、

伽藍の整備や多くの弟子を育てるとともに、各地に黄檗の寺を開くなど、日本の禅宗黄檗派の発展に寄与しました。

臨済宗の一派である黄檗派の僧たちは書や詩文に巧みで江戸時代は人々の中国趣味や文人趣味と結びついて、黄檗趣味といわれるものが流行しました。彼らの書は多くの人が競って求めるところとなり、彼らも拒むことなく揮毫して与え、寺院では扁額や聯に刻されることも多く、堂の内外を飾ったという事です。木庵も書にすぐれ、隠元・即非とともに黄檗の三筆と称されました。

次にこの扁額を寄付した二人の事です。福岡藩の「寛文官録」に「竹中与右衛門組大名 七百五拾石 加藤弥左衛門」「詰衆 六人扶持 八左衛門二男 鎌田八兵衛」という記録があります。寛文(1661~1673)何年の記録か分かりませんが、延宝2年前12~3年内の記録ですので、同一人物と考えても無理はないと思います。

また、鎌田八兵衛は八左衛門の

二男(三男と伝える本もあり)とありますが、八左衛門というのは同官録によると「次老 四千五百石 鎌田八左衛門昌勝」ということとなります。昌勝というと寛文9年(1669)に戒壇院の本堂を再建した人です。すると父が建てたお堂に掲げる額を息子が寄進したというわけです。ただ昌勝再建の堂は改築された後、大破し、現在の本堂は江戸時代の半ばに移築された堂が基本となっているようなので、残念ながらも今は父親が建てたお堂に息子の額というわけではないのですが。

最後にどうして木庵筆の額なのかを考えてみましょう。

前述したように黄檗僧の書は人氣があつたという事。延宝当時の住職は博多崇福寺から来た智玄。崇福寺は臨済宗で木庵の黄檗派も同宗である。黄檗派はことに上級武士階級に広がった。このころ、木庵は長崎や柳川の寺に書を残している。このようなことを考え合わせると、戒壇院に宇治万福寺の木庵禅師の墨跡が残っていても不思議ではないかもしれません。

太宰府の文化財

199

宝満山の自然林



▲宝満山から仏頂山にかけての斜面に成立するブナ・モミ自然林



▲世界における照葉樹林の分布

『太宰府市史』の環境資料編が発行されましたので、今回はそれを基に太宰府の自然について紹介してみましよう。

太宰府の自然を植物が生えている状態から概観すると、自然に生えた植物が優占している土地の面積は市域の19%、

杉や檜、竹、田畑、公園、ゴルフ場など人間の手が大きく入って植物が植えられている土地は全体の41%、家や工場、運動場、造成地、川や池など植物がない土地が40%という構成になっています。(1990年調査)

19%は自然度が高いといっても、その半分以上は40〜50年前まで薪や炭の原料として繰り返し利用されたシイやカシの林で、これらは人里に近い低い丘陵に分布しているため、宅地開発などで、今も減少の傾向にあります。調査から10年以上、いくつかの森が既に姿を消しました。

このような身が細った自然ですが、一つ注目されるのは宝満山に残る森です。山頂付近の標高700m以上に出現するブナを中心とする林、その少し下からブナ林とモザイク状に混生しているモミ林、その下の標高450mくらいから出現するアカガシ林、その下は今も杉や檜の人工林になっていますが、本来はシイやタブ、カシやクスなどの森が広がっていたと思われます。

緯度が低い九州では温帯落葉広葉樹のブナや温帯常緑針葉樹のモミなどは標高1000mくらいの高い山にしか生育しないので、あまり高い山がない福岡県では英彦山、背振山と宝満山くらいでしか、

これらを見ることができません。その意味で、宝満山のブナやモミの林は貴重です。一方、前述のようにそれらの下に分布していたシイやカシ、クス、タブなどは常緑広葉樹、あるいは照りのある厚葉を持つているので照葉樹とも呼ばれる木々です。鬱蒼と茂った林は色濃く、暗い森ですが、そこは多種多様な生物が生きる豊かな森です。私たちはあまりにも身近な森なのでついその豊かさを忘れて、うっとうしいとか、虫が多い、季節の変化に乏しいなど文句が先に立ちますが、地球全体から見ればこの照葉樹林帯は中国南部、台湾、朝鮮半島南部、そして西日本という大変狭い範囲にしか分布していない貴重な森なのです。そんな照葉樹の森とそれより寒い地域に広がる落葉広葉樹の森が垂直分布し、森としての本来の姿を見ることが出来る所として宝満山一帯は貴重な森なのです。

太宰府の文化財

200

筑前太宰府鷺換追儼之図

縦41cm 長169・8cm 絹本着色
齋藤秋圃筆 江戸時代 福岡市博物館蔵



お正月の7日に行われる太宰府天満宮の鷺替えと鬼すべを描いたものです。

画面の右側に描かれた鷺替

▲鷺替えの様子が描かれた部分

この図には大小の木うそが台に並べて売られ、三度笠をかぶった人や荷物を背負った人なども次々と輪に参加して鷺替えが賑やかに行われている様子が描かれています。「替えましょ替えましょ」という声か聞こえてきそうな生き生きとした人々の表情が写し取られていて、齋藤秋圃のすぐれた技量を感じさせます。

画面左半分には追儼いわゆる鬼すべの様子が描かれています。松明を先頭に鬼を守る鬼警護の人たちがテン棒を肩に（「オンジャヤ、オンジャヤ」へ鬼じゃ、鬼じゃん」と言いながら）走っています。頭は手拭いに縄鉢巻を締めて額のところで角の形に結んだものを付け、体には麻縄、藁縄をたすきにかけて命綱としている姿が描かれ、現在の装束がすでに行われていたことが分かります。

「大」や「幸」の字が書かれています。現在は「三条組」「連」「桜若」の文字が書かれていますので、これは少し異なっています。頭も足軽が被る陣笠のような笠を被っているのも現在と違うところです。

鬼すべの図でも分かるように軽妙に、スピードを感じさせる筆使いで人間を描写することに特異な才能を発揮した齋藤秋圃は江戸時代の明和5年（1768）に京都で生まれ、葵衛、双鳩、秋圃、土筆翁などと号しました。画は円山応挙、森狙仙に学び、上方で活躍した後、40歳を前に秋月藩のお抱え絵師となり、晩年の約30年を太宰府で過ごし92歳で亡くなりました。

秋圃については、またの機会に詳しくお話しするとしまして、この図のことですが、これは黒田家が所蔵していたものです。記録によると安政2年（1855）天満宮の大鳥居信全が鬼燵の図を福岡藩主黒田斉博に献上したそうで、この図巻はそれにあたるかもしれないと考えられています。ちなみにこの図は秋圃86歳、嘉永6年（1853）の作品ですから、献上はそれから2年後に当たります。



▲鬼すべの様子が描かれた部分